

<研究ノート>

保育者志望の女子大学生における共感性の多次元的把握と 保育者特性との関連¹

木野和代
高橋靖子

1. 問題と目的

(1) 保育者の質と保育者養成

日本社会は少子化が深刻化しているにもかかわらず、待機児童の問題が解決困難な状況にある。その背景には、女性の社会進出が進んだことや共働き世帯の増加、核家族化により、保育ニーズが高まったことに加え、都市部への人口集中、保育士不足といった事情がある。これらのうち、保育士不足に関して、2017年に内閣府が打ち出した「新しい政策パッケージ」には、待機児童の問題に対して「子育て安心プラン」の早期実現をめざし、保育士確保に一層取り組むことが盛り込まれている（内閣府, 2017）。

待機児童問題は保育所や保育士不足といった保育における量の問題であるが、同時に質の確保・向上も求められているのが現状である。乳幼児期の教育とケア（Early childhood education and care; ECEC）の質、すなわち、保育²の質を高めるための方策について、OECD（2012a 秋田他 2019 訳）による『Starting Strong III』には、5つの政策手段が提示されている。その3点目には、保育者の「資格、養成・研修、労働環境の改善」があげられ、保育者の資格認定、初期養成教育、職能開発、労働条件が改革すべき領域であるとされている。これは、保育の質を向上させる上で、子どもの発達と学習において主要な役割を担う保育者の質が重要となるということを意味している。そして、日本では5つの政策手段のうち、この3点目に重点がおかれてきたという（OECD, 2012b）。実際、こうした動きは保育所保育指針の変遷からも垣間見える（天野, 2019）。また、度重なる改正を経て、現行の保育所保育指針（厚生労働省, 2017, 2018）には、保育士の業務に保護者支援が反映されたり、保育所には地域の子育て支援拠点としての役割が明記されたり、アレルギーや障害のある子どもへの対応に関する詳細な記述が取り入れられたりしていることなどから、保育士には多様で高度な専門性が求

¹ JSPS 科研費（課題番号 JP26380943）の助成を受けた。

² 池本・立岡（2017）は、ECEC を意味する用語として「保育」を用いている。

められるようになってきたといえよう。

以上から、専門性を有する保育者の養成・確保が、保育における量と質の両方の問題に対応する一方策として求められていることがわかる。このために、保育者の初期養成教育を担う大学等の保育者養成機関が果たす役割は大きいと考えられる。そして、これらの教育機関では、保育者としての資質・能力を備えて社会に貢献できる人材を輩出することを目標とした教育が行われている。また、目標を実現するために、保育者に求められる資質・能力を高めるようなカリキュラム、指導のあり方の検討やその参考資料を提供する研究がこれまでに多数なされてきた (e.g., 江田, 2007; 濱名, 2015; 長谷部, 2004; 榊原・小川・杉山, 2018)。

(2) 保育者に求められる資質 (保育者特性)

保育者としての資質・能力をとらえるに際して、スキル以外の側面の重要性も指摘されている。藤村 (2010) は、保育者として重要な資質について、保育士養成課程や幼稚園教諭免許取得課程における資格科目の履修によって得られる知識や技能は当然のことであるが、これらの技量が活かされるかは、個人のパーソナリティ特性のあり方によるとしている。そしてこのような特性を測定する保育者特性尺度 (Nursery Trait Inventory; NTI) を開発するとともに、この保育者特性について「保育者と子どもとの社会的関係に機能する保育者の行動傾向」で、「健康的な方向で機能する個人の自律的、独立的で他者に対する基本的な信頼感を有し、活動的で身軽に行動することができ、積極的な特性である」と説明している (藤村・石, 2013, pp. 70-71)。NTI は、こうした保育者適性を個人の行動傾向として多面的にとらえるためのもので、「養育性」、「愛他性」、「共感性」、「論理的思考性」、「気働き」、「社交性」、「行動力」の7つの側面を測定するものである。各下位尺度は、価値観や心構えというよりも、実際の保育行動に表れると考えられる行動傾向を表す内容を意識して作成されている。その後も、さらなる妥当性の検討や標準化が行われている (藤村, 2011, 2012; 藤村・石, 2013)。

藤村 (2010, 2011) によれば、各下位尺度は次のような傾向を意味する。「養育性」は、子どもに対する思いの強さや、子どもの成長や発達のために子どもの世話をしたり、援助したり、子どもにとって自分がよい影響を及ぼそうとする傾向の強さを表す。「愛他性」は、見返りを求めることなく他者の利益を重んじる行動傾向を表す。「共感性」は、他者の感情や心理状態をあたかも自分のことのように感じ、喜んだり、悲しんだり、心が痛んだりする傾向を表す。「論理的思考性」は、勘に頼らず、感情に流されず、多面的に物事を考え、解らないことは理解する努力をし、事実や論理、あるいは普遍的な理論や法則性などを基準に物事を考え、理解し、主体的に自分の認識を深めようとする傾向を表す。「気働き」は、対人的行動に際して相手の心の状態、気持ちや動機などを繊細に感じ取り、それらを受け容れようとする基本的態度で、それ故に相手の気持ちに機敏に気配りをする傾向を表す。「社交性」は、緊張や特別

な心的エネルギーを必要としないで、気軽に、自然体で他者との交わりが行われる傾向を表す。このような行動傾向が高ければ、人間関係の幅も広くなるのが一般的とされている。「行動力」は、よいと思うことをあまり躊躇することなく積極的に実行し、自分の思いや考えを行動に移すことをためらわない決断力、実行力の多少を表す。

藤村（2010, 2011, 2012）はこれらの7つの特性をさらに構造化して、「養育性の3要因構造モデル」としてとらえることを提案している。すなわち、「愛他性」と「共感性」に共通する要素として「情緒的受容」を、「論理的思考性」と「気働き」については「多面的認知」を、「社交性」と「行動力」については「行動的積極性」を仮定している。そして、「情緒的受容」は養育や教育の営みには必然のものであり、そのもとに、「多面的認知」と「行動的積極性」が機能して、養育的行動に結びつくとし、一方で、「養育性」は「情緒的受容」を内包するものであると位置づけている。その後、藤村・石（2013）はこの構造についてさらに分析を進め、「愛他性」「共感性」「養育性」を「情緒的受容性³」として扱っている。また、「論理的思考性」「気働き」に共通に機能する「多面的認知」に関しては「思考的繊細性」と呼ぶのが妥当としている。このように藤村（2010）における3要因構造モデルは検討過程での若干の修正はあるものの、「共感性」は「養育性」と近い関係にあり、保育者の基礎的な資質として捉えられていると考えられる。

（3）保育者に求められる共感性

藤村（2010）による保育者特性のなかでとりあげられた「共感性」は、他の研究においても、保育者にとって必要な資質として重要視されている（e.g., 秋政・中山・伊藤, 2009; 三木, 2015）。また、保育現場の管理者からも、子どもの思いや願いを的確にとらえる洞察力や、思いやりの心は、「今、保育現場で求められる保育士の資質能力⁴」として認められている（江田, 2007）。このように、共感性は、他の対人援助職と同様に、保育者にとっても備え、高めるべき資質と見なされている。しかし、対人援助職においては、メンタルヘルスの観点から共感疲労が懸念される。

共感疲労（compassion fatigue）とは、支援対象者に対する深い共感や同情の感覚が、その相手との関係の中で次第に摩滅し、意欲低下を引き起こし、対人支援活動を妨げるようになることを意味し、看護師、医師、教師、警察官、カウンセラーなど、幅広い対人援助職について用いられる用語である（今・菊池, 2007）。保育者の場合には、多様化する現場で、様々な状況にある子どもや家族に寄り添うなかで、相手の気持ちに共感しすぎることが、共感疲労に結

³ 藤村（2010）では「情緒的受容」と表記されていたが、藤村・石（2013）では「情緒的受容性」と表記されている。

⁴ 江田（2007）は、資質と能力を区別せず、「資質能力」と表現し、一体的にとらえて論述している。

びつくこともあるのではないだろうか。本邦では、諏訪（2011）らが、共感疲労と関連の深い感情労働⁵という概念を用いて、保育者の専門性を見直し、これを高める手がかりを見いだそうと継続的に検討を続けている。しかし、保育者の共感疲労を直接的に扱った研究は筆者らの知る限り見られない。そこで筆者らは、保育者志望の大学生の共感性を多次元的にとらえ、共感疲労に陥りやすい／陥りにくい共感性のあり方を検討し（e.g., 木野・鈴木・内田, 2011）、その知見に基づいて、保育者のメンタルヘルスを維持し長期的な職場貢献を可能にするような対応策の一つとして、保育者にとって望ましい共感性を考える教育プログラムを作成することを目指してきた⁶。

(4) 共感性の多次元の把握

共感疲労との関連から共感性を検討するにあたっては、共感性を多次元的に把握することが重要である。筆者らの一連の研究においては、共感性を捉えるための測度として、共感性の概念を幅広く捉えた多次元共感性尺度（Multidimensional Empathy Scale: MES; 鈴木・木野, 2008）を用いてきた。鈴木・木野（2008）によれば、MESの特徴は、共感性の情動的所産と認知的過程の生起に関わる個人傾性を測定するものであり、認知・情動の区別に加え、他者指向性－自己指向性という指向性の弁別に焦点をあてている点である。これらは「視点取得」「想像性」「他者指向的反応」「自己指向的反応」の下位概念により測定される。また、情動面については応答の所産とは別に並行的所産を測定する下位概念「被影響性」を含む。下位概念間の関係は、表1のように整理されている。「視点取得」は相手の立場からその他者を理解しようとする他者指向的な認知傾向、「想像性」は自己を架空の人物に投影させる自己指向的な認知傾向、「他者指向的反応」は他者に焦点づけられた情緒反応傾向、「自己指向的反応」は他者の心理状態について自己に焦点づけられた情緒反応傾向、「被影響性」は他者の感情や意見に影響されやすい傾向を表す。

藤村（2010）による保育者特性尺度においても下位概念として共感性が含まれている。しかし、測定項目は、「人の気持ちになって喜んだり悲しんだりすることがたびたびある」「つらい思いをしている人を見ると自分もつらくなる」「人の気持ちを自分に置き換えて物事を考えることがよくある」など、他者の心理状態に対する反応傾向を捉えるものではあるが、認知・情動の区別、指向性の弁別が明確になされたものとはいえない。このように、他者の心理状態に対する反応傾向を包括的にとらえた共感性の測定は、他者の感情への敏感な反応性を把握す

⁵ ホックシールドによって提唱された概念で、「公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行う感情の管理」を意味する（Hochschild, 1983 石川・室伏訳 2000, p. 7）。共感疲労は感情労働の負の側面がもたらすものと位置づけられる（e.g., 南, 2015）。

⁶ その成果として提案されたプログラム案の実践結果は、内田・木野（2020）において報告されている。

表1. MES下位尺度の位置づけ（鈴木・木野（2008）をもとに作成）

		情動面	
		並行的所産	応答的所産
他者指向性	視点取得 [5]	被影響性 [5]	他者指向的反応 [5]
自己指向性	想像性 [5]		自己指向的反応 [4]

[] 内は項目数

るためには有用であると考えられるが、共感疲労の可能性を考慮するならば、多次元的な把握も必要と考えられる。例えば、MESと仮想場面での共感疲労傾向の関連を検討した木野他（2011）の研究では、共感疲労傾向は、「他者指向的反応」および「視点取得」との間には負の関連が見られたのに対し、「被影響性」および「自己指向的反応」との間には正の関連が見られるといったように、共感性の側面によって、共感疲労傾向との関連の方向が異なることが示されている。

(5) 本研究の目的

そこで本研究では、保育者にとって望ましい共感性の様相をとらえる試みの一つとして、保育者養成課程に在籍する女子大学生を対象に、多次元共感性尺度と保育者特性尺度の関連を明らかにする。これにより、保育者特性との関連から保育者にとって望ましい共感性を検討する。

上述のとおり、これまでの多次元共感性尺度を用いた保育者志望女子大学生を対象とした検討では、他者指向性に該当する「他者指向的反応」「視点取得」の高さが仮想場面での共感疲労傾向の低さと結びつくが、「自己指向的反応」「被影響性」については、その逆の関連が見られることが示されている（e.g., 木野他, 2011）。したがって、保育者として重要な資質を測定する保育者特性尺度と、他者指向的側面の「他者指向的反応」と「視点取得」は正の関連、「被影響性」「自己指向的反応」は負の関連を示すことが想定される。ただし、保育者特性の下位側面ごとの関連については、探索的に検討を行うこととする。

2. 方法

(1) 調査対象者および手続き

4年制の保育者養成課程または教員養成課程に在籍する2015年度A大学4年次生90名、2015年度～2017年度B大学3年次・4年次生128名（4年次の対象者は3年次には回答していない）を対象に、質問紙調査を実施した。このうち、将来の進路希望が保育士または幼稚園

教諭であった119名(3年次生75名、4年次生44名;年齢平均20.52歳、 $SD=0.62$;全て女性)を分析対象とした⁷。

調査実施時期はいずれも5月～6月で、講義時間を利用して調査用紙を一斉に配付し、その場で回答と提出を求めた。なお、4年次生への実施は、対人援助職における共感性を扱った授業内容の一部として行われた。

(2) 調査内容

①多次元共感性尺度：鈴木・木野(2008)による多次元共感性尺度(Multidimensional Empathy Scale: MES)を用いた。他者指向的反応(5項目)、自己指向的反応(4項目)、被影響性(5項目)、視点取得(5項目)、想像性(5項目)の5下位尺度からなる。回答は、「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」の5件法で求めた。

②保育者特性尺度：藤村(2010)による保育者特性尺度(NTI)⁸を用いた。養育性、愛他性、共感性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力の7下位尺度からなり、各下位概念は7項目で構成されている。本研究では、共感性はMESにより多次元的に扱うため、NTIの7下位尺度のうち共感性を除く6下位尺度に対応する42項目への回答を求めた。各項目がいつもの自分にどの程度当てはまるか、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の5件法でたずねた。

③その他：性別、年齢、将来の進路希望についてたずねた。将来の進路希望については、保育者養成課程と教員養成課程で質問の仕方が異なった。すなわち、前者については、将来の職業として保育者を考えているかについて、「はい」または「いいえ」を選択する形式を採用した。後者については、「保育士」「幼稚園教諭」「小学校教員」「中学校教員」「高校教員」「一般企業」「その他」の選択肢から、志望する職業について志望順位を記入する形式とした。これらの他に、身近に保育者経験者がいるか、理想の保育者像などもたずねたが、いずれも本研究とは別の研究目的のために用意されたものであった。

⁷ 将来の進路希望の質問形式は後述するが、保育者養成課程の対象者については、保育者志望であると回答した者を、また、教員養成課程の対象者については、将来の進路希望として「保育士」または「幼稚園教諭」を第一希望としている者のみを分析対象とした。

⁸ 藤村(2010)によるNTIは、既述のとおり、その後の研究において妥当性、標準化の検討がなされた(藤村, 2011, 2012; 藤村・石, 2013)。その後、竹井機器工業株式会社により、実施手引きとともに製品化されている。

3. 結果

(1) 各下位尺度得点の検討

MES および NTI の各下位尺度得点の算出に際して、5 件法の数値化については、原典どおり、MES では 1~5 を、NTI では 0~4 を割り当てた。各下位尺度を構成する項目についても、原典にしたがい、本研究では評定値の合計値を下位尺度得点とした。

各下位尺度得点の α 係数を算出したところ、MES の自己指向的反応を除いては .60 以上の値を示した。MES の自己指向的反応については、本研究のデータでは $\alpha = .45$ と低い値であった。しかし、下位概念としての自己指向的反応の重要性、および鈴木・木野（2008）では $\alpha = .60$ の値が得られていたことを考慮し、本研究では引き続き検討に加えることとする。その際に、MES 短縮版（木野・鈴木、2016）で採用されている 2 項目の合計を尺度得点とした。これらの 2 項目間の相関は $r = .23$ で、短縮版を検討した木野・鈴木（2016）と同程度の値であった。

各下位尺度の平均値および標準偏差、 α 係数等を表 2 に示す。

次に、本研究における平均値を原典と比較して、本研究における調査対象者の特徴を確認し

表 2. MES および NTI の下位尺度得点に関する記述統計量

	<i>M(SD)</i>	<i>N</i>	最小値	最大値	項目数	α 係数
MES (5 件法; 1-5 で得点化)						
他者指向的反応	20.05(2.38)	119	15	25	5	.64
自己指向的反応	14.00(2.27)	119	5	20	4	.45
自己指向的反応 (SF) ^{注1)}	7.83(1.35)	119	2	10	2	— ^{注2)}
被影響性	17.11(3.57)	119	10	25	5	.75
視点取得	18.58(2.78)	118	11	25	5	.68
想像性	18.36(3.49)	118	9	25	5	.70
NTI (5 件法; 0-4 で得点化)						
養育性	19.29(3.39)	117	10	28	7	.76
愛他性	19.68(3.59)	119	7	28	7	.81
論理的思考性	17.04(4.21)	119	3	28	7	.75
気働き	17.66(4.39)	119	1	28	7	.83
社交性	15.71(5.90)	119	1	28	7	.90
行動力	16.24(4.67)	119	1	28	7	.87

注1) 自己指向的反応 (SF) は、木野・鈴木（2016）の短縮版の項目構成による尺度得点。

注2) 自己指向的反応 (SF) を構成する 2 項目間の相関係数は .23 であった。

た。MESについては、鈴木・木野（2008）における女子大学生の平均値と比較した⁹。この際、鈴木・木野（2008）では構成される項目で除算した値が用いられていたため、本研究の値にも同様に処理した得点を用いて、*t* 検定を行うこととした。その結果、「他者指向的反応」（以降、本研究、原典の順に、 $M=4.01, 3.92; t(118)=2.07, p<.05$ ）、「被影響性」（ $M=3.42, 3.27; t(118)=2.32, p<.05$ ）、「視点取得」（ $M=3.72, 3.47; t(117)=4.82, p<.001$ ）において、本研究の対象者の平均値の方が高いことが示された。この結果は、木野他（2011）における保育者志望女子大学生の結果と概ね合致しており、保育者志望女子大学生の方が、非養成課程の女子大学生に比べて、他者指向的な次元の得点が高いこと、他者の感情に影響を受けやすいことが改めて確認された。

NTIについては、藤村（2010）における保育者志望女子大学生の平均値と比較した。その結果、「養育性」（ $M=19.29, 18.18; t(116)=3.54, p<.001$ ）、「愛他性」（ $M=19.68, 18.85; t(118)=2.52, p<.05$ ）、「論理的思考性」（ $M=17.04, 16.05; t(118)=2.57, p<.05$ ）においては、本研究の対象者の平均値の方が高かった。しかし、「社交性」（ $M=15.71, 16.84; t(118)=-2.10, p<.05$ ）については、本研究の対象者の平均値の方が有意に低いことが示された。

なお、藤村（2010）における保育者志望女子大学生の得点について、藤村（2012）は現役保育者を含む他の集団との比較を行っている。現役保育者との差異に焦点をあててみると、藤村（2010）の保育者志望女子大学生に比べて、藤村（2012）の現役保育者は「養育性」の得点が高い（ $M=19.51$ ）ことが示されている。これを踏まえて、本研究のサンプルについても現役保育者と比べてみると、「養育性」の高さにおいて、藤村（2012）における現役保育者水準であったといえる。

(2) 多次元共感性と保育者特性との関連

両尺度の下位尺度得点間の相関係数を算出した（表3）。MESにおいて他者指向性を測定する「他者指向的反応」（情動面）および「視点取得」（認知面）は、NTIの「養育性」「愛他性」「論理的思考性」「気働き」と正の関連を示した。さらに、「視点取得」は、「社交性」「行動力」といった「行動的積極性」にかかわる側面とも正の関連を示しており、本研究で取り扱ったNTIの6側面全てと関連することが見いだされた。他方で、MESの「自己指向的反応」および「被影響性」は、NTIの「社交性」「行動力」と負の関連を示した。また、MESの「想像性」については、今回取り上げたNTIの6側面とはほぼ無相関であった。

次に、共感性の類型により保育者特性がどのように異なるのか検討を行った。共感性による対象者の類型化に際しては、MES各下位尺度の標準化得点に基づいてクラスタ分析（SPSS

⁹ 自己指向的反応については、木野・鈴木（2016）による短縮版の項目構成にならって尺度得点を算出したため、木野・鈴木（2016）における女子大学生の平均値と比較した。

表3. MESおよびNTIの下位尺度得点間の相関係数

	他者指向 的反応	自己指向的 反応 (SF)	被影響性	視点取得	想像性	養育性	愛他性	論理的 思考性	気働き	社交性	行動力
MES											
他者指向的 反応	1.00	.11	.22*	.41***	.20*	.41***	.56***	.27**	.29**	.13	.19*
自己指向的 反応 (SF) ^(注1)		1.00	.28**	-.05	.08	.12	.11	.07	-.02	-.24*	-.31***
被影響性			1.00	.01	.12	.06	.16	.01	-.03	-.27**	-.25**
視点取得				1.00	-.03	.29**	.35***	.37***	.35***	.30**	.36***
想像性					1.00	.05	.18	.05	.10	.18	.13
NTI											
養育性						1.00	.56***	.42***	.46***	.30**	.39***
愛他性							1.00	.44***	.47***	.07	.19*
論理的 思考性								1.00	.37***	.08	.22*
気働き									1.00	.30**	.37***
社交性										1.00	.69***
行動力											1.00

^(注1)自己指向的
反応 (SF) は、木野・鈴木 (2016) の短縮版の項目構成による尺度得点。
*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$
N = 116

表4. 各クラスタのMES下位尺度標準化得点の平均 (SD) および分散分析の結果

MES下位尺度	クラスタ	CL1 (n=69)	CL2 (n=49)	F (1,116)	
		M (SD)	M (SD)		
他者指向的反応		-0.36(0.95)	0.54(0.81)	28.92***	CL1<CL2
自己指向的反応 (SF) ^{注1)}		0.32(0.73)	-0.42(1.15)	17.82***	CL1>CL2
被影響性		0.36(0.90)	-0.48(0.91)	24.75***	CL1>CL2
視点取得		-0.47(0.88)	0.66(0.75)	53.15***	CL1<CL2
想像性		0.10(0.96)	-0.15(1.05)	1.78	

注1) 自己指向的反応 (SF) は、木野・鈴木 (2016) の短縮版の項目構成による尺度得点。
*** $p<.001$

表5. 各クラスタのNTI下位尺度得点の平均 (SD) およびt検定の結果

NTI下位尺度	クラスタ	CL1		CL2		t (116) ^{注1)}
		M (SD)	n	M (SD)	n	
養育性		18.65(3.47)	69	20.21(3.11)	47	-2.48*
愛他性		18.86(3.77)	69	20.90(2.99)	49	-3.15**
論理的思考性		16.13(4.28)	69	18.16(3.72)	49	-2.68**
気働き		16.68(4.62)	69	19.02(3.73)	49	-2.93**
社交性		14.16(5.89)	69	17.78(5.28)	49	-3.43***
行動力		15.10(4.51)	69	18.04(4.18)	49	-3.59***

注1) 養育性のみ自由度が異なる (df=114)。
*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

による Quick Cluster) を行った。類似性の高い者を探索的に分類するため、2 から 4 のクラスタ数を設定して非階層的なクラスタ分析を試み、各クラスタに含まれる対象者数および解釈可能性などの観点から検討した結果、2 クラスタによる分類を採用した (表4)。得られた2 クラスタについて、MES 下位尺度の標準化得点を比較したところ、「他者指向的反応」と「視点取得」においては第1クラスタ (CL1) よりも第2クラスタ (CL2) の得点が高く、「自己指向的反応」と「被影響性」においてはCL1よりもCL2の得点が低かった。本調査対象者のデータに基づく分類では、CL2は他者指向性高群、CL1を他者指向性低群と位置づけられる。

この2クラスタについて、保育者特性の各下位尺度得点を比較したところ、全ての下位尺度において、CL2の得点がCL1の得点よりも高かった (表5)。つまり、本研究における他者指向性高群は、低群に比べて、保育者特性が高いことが示された。

4. 考察

本研究は、多次元共感性尺度を用いて、保育者にとって望ましい共感性のあり方を保育者特性との関連から多次的に検討することを目的とした。既述のとおり、他者指向性の側面にあたる「他者指向的反応」と「視点取得」は保育者特性と正の関連を、「被影響性」「自己指向的反応」は保育者特性と負の関連を想定していた。本研究の結果からは、保育者特性の下位側面によってはほぼ無関連の場合もあったが、関連が見られたものについては、想定どおりの関連の方向が示された。

保育者特性の下位側面別に詳細にみると、MESの他者指向性の側面と正の関連を示したのは、NTIの「情緒的受容性」にかかわる「愛他性」と「養育性」であった。なかでもMES「他者指向的反応」は中程度の関連の強さを示した。したがって、共感性のなかでも他者指向的な認知・情動反応は、保育者としての適性との関連からも、望ましい傾向であるといえよう。

さらにMESの「視点取得」については、NTIの「行動的積極性」2側面（「社交性」「行動力」）と正の関連を示した。相手の視点に立って考えることができること、またその自信が、他者と積極的に関わり、必要な行動を起こすことにつながっているのではないだろうか。すでに多くの保育者養成機関においては、子どもや保護者、同僚といった他者の立場で考える姿勢をより意識化したり、事例検討やロールプレイで多様な立場への理解を深めたりすることを通して、視点取得傾向を強化するような活動を、実習・演習科目に組みこんでいるのではないかと思われる。社交性や行動力を直接的に養うだけでなく、こうした視点取得能力を高める取り組みによって、身につけた保育者としての知識やスキルをより一層発揮できる人材が輩出されることが期待される。

他方で、NTIの「行動的積極性」と負の関連が見られたのは、MESの「自己指向的反応」「被影響性」であった。「被影響性」は周囲の反応からの影響の受けやすさ、「自己指向的反応」は他者に起こった出来事により自分自身を振り返り一喜一憂する傾向といえる。いずれも、周囲を気にする傾向の強さが、ネガティブな方向に働き、積極的な行動を妨げる可能性が考えられ、これらの共感性の側面は保育者としての適性との関連でも、課題となることが示唆された。また、藤村・石（2013）による幼稚園児の母親を対象とした母親自身の保育者特性に関する調査において、「行動的積極性」、そのなかでも「社交性」と育児不安の間に負の関連が見られたことも勘案すると、保育の専門家としての技量を発揮し、健康的に職場適応するためには、「自己指向的反応」「被影響性」の側面は高すぎないことが望ましいといえよう。

以上に加えて、クラス分析による共感性類型別の分析においては、他者指向性の側面が平均より高く「自己指向的反応」「被影響性」が平均より低い他者指向性高群（CL2）は、その

逆の他者指向性低群 (CL1) に比べて、保育者特性が全体に高かった。したがって、保育者特性という観点から、保育者として望まれる共感性は、「自己指向的反応」「被影響性」が高すぎず、他者指向性の側面が高い、CL2 のようなバランスのものであると考えられた。

ただし、ここでの類型化は、本研究の調査対象者のデータに基づくものである。また、本研究はメンタルヘルスとの関連を直接検討するものではない。したがって、保育者にとって望ましい共感性をとらえようとする筆者らの一連の研究において本研究は基礎的・探索的分析であり、今後、現職保育者を対象に共感性を多次的にとらえて、共感疲労やメンタルヘルスとの関連を検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 秋政邦江・中山芳一・伊藤智里 (2009). 保育者の共感性向上のためのカリキュラム開発—絵本を教材とした共感意欲向上カリキュラムを中心に— 川崎医療短期大学紀要, 29, 43-48.
- 天野佐知子 (2019). 保育所保育指針の変遷に関する一考察—領域「環境」の保育内容に着目して— 金沢星稜大学人間科学研究, 13 (1), 1-6.
- 江田美代子 (2007). 保育士に求められる資質能力に関する調査研究 宮崎女子短期大学紀要, 34, 31-46.
- 藤村和久 (2010). 保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 9, 129-143.
- 藤村和久 (2011). 保育者特性インベントリーの妥当化 (1) 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 1, 86-96.
- 藤村和久 (2012). 保育者特性インベントリィ (NTI) の標準化 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 2, 23-33.
- 藤村和久・石曉玲 (2013). 保育者特性検査の妥当化 (2) —育児不安、自己観および YG 性格検査との関連性— 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 3, 63-71.
- 濱名陽子 (2015). 保育者の早期離職に関する考察—養成教育との接続の課題— 教育総合研究叢書, 8, 91-105.
- 長谷部比呂美 (2004). 保育者養成課程に学ぶ学生の能力自己評価と保育者志望の動機 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 2, 129-137.
- Hochschild, A. R. (1983). *The managed heart: Commercialization of human feeling*. CA: University of California Press.
- (石川准・室伏亜希 (訳) (2000). 管理される心—感情が商品になるとき— 世界思想社.)
- 池本美香・立岡健二郎 (2017). 保育ニーズの将来展望と対応の在り方 JRE レビュー, 42, 37-65.
- 木野和代・鈴木有美 (2016). 多次元共感性尺度 (MES) 10 項目短縮版の検討 宮城学院女子大学研究論文集, 123, 37-52.
- 木野和代・鈴木有美・内田千春 (2011). 対人援助職における共感性 (1) —保育者を目指す学生の特徴と共感疲労の関連— 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 906.
- 今洋子・菊池章夫 (2007). 共感疲労関連尺度の作成 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 9, 23-29.
- 厚生労働省 (2017). 保育所保育指針<平成 29 年告示> フレーベル館
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000202211.pdf> (最終閲覧日: 2020 年 6 月 10 日)
- 三木澄代 (2015). 保育者養成のための実習と大学生の共感性に関する一考察 環太平洋大学研究紀要, 9, 15-20.
- 南彩子 (2015). ソーシャルワークにおける共感疲労とレジリエンス 天理大学社会福祉学研究室紀要, 17, 15-23.

- 内閣府 (2017). 新しい経済政策パッケージ (平成 29 年 12 月 8 日閣議決定) <https://www5.cao.go.jp/keizai1/package/package.html> (最終閲覧日: 2020 年 6 月 14 日)
- OECD (2012a). *Starting strong III: a quality toolbox for early childhood education and care*. OECD Publishing. <https://dx.doi.org/10.1787/9789264123564-en>
(秋田喜代美・阿部真美子・一見真理子・門田理世・北村友人・鈴木正敏・星三和子 (訳) (2019). OECD 保育の質向上白書—人生の始まりこそ力強く: ECEC のツールボックス— 明石書店)
- OECD (2012b). *Quality matters in early childhood education and care: Japan 2012*. OECD Publishing. <https://dx.doi.org/10.1787/9789264176621-en>
- 榊原尉津子・小川真由子・杉山佳菜子 (2018). 保育実習の振り返りと自己評価 (2) —現場で求められる保育者の資質能力向上を考える— 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文科学・社会科学編, 1, 171-183.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, 56, 487-497.
- 諏訪きぬ (監修) (2011). 保育における感情労働—保育者の専門性を考える視点として— 北大路書房.
- 内田千春・木野和代 (2020). 保育者養成で行う「共感疲労に陥らないための共感性プログラム」の提案と評価—ふりかえり課題記述内容の分析による評価報告— ライフデザイン学研究 (東洋大学ライフデザイン学部), 15, 11-28.

The relationship between multidimensional empathy and nursery traits regarding female students in the kindergarten and nursery-school teacher education courses

Kazuyo KINO

Yasuko TAKAHASHI

The purpose of this study was to explore the dimensions of empathy related to aptitude in kindergarten and nursery school teachers. A self-report questionnaire, including the Multidimensional Empathy Scale (MES) and the Nursery Trait Inventory (NTI), was administered to 119 female undergraduates in the kindergarten and nursery-school teacher education courses. MES was constructed with the five subscales; Other-Oriented Emotional Reactivity (OR), Self-Oriented Emotional Reactivity (SR), Emotional Susceptibility (ES), Perspective Taking (PT), and Fantasy (FA). Correlation analysis revealed that the OR and PT were positively related to nurturing, altruistic, logical thinking, and responsiveness scales in NTI. PT was also positively correlated with the sociability and power of action scales, i.e. behavioral forwardness, in NTI. On the other hand, SR and ES were negatively related to sociability and power of action scales. These results will contribute to future research on compassion fatigue and well-being of kindergarten and nursery school teachers.